

「黒幕」に挑む探偵と怪盗

— 中国近代探偵小説における本土化の一側面 —

池 田 智 恵

Detectives and Thieves Challenge “Black Curtain”:

Modern Chinese Mystery Novels and a Side View of Their Naturalisation

IKEDA Tomoe

At the end of the Qing period, there was a boom in the translation of mystery novels; however, the writing of mystery novels by Chinese authors did not become popular until the 1920s. Beginning in the late 1910s, mystery-writing contests were announced in the newspaper readers' columns, and many of the submissions resemble the earlier translated works all being set in overseas locations. At the same time, Chinese newspapers were overflowing with reader submissions, known as “black curtain” articles, that disclosed the darker side of society, that were extremely popular. With the appearance of mystery novels, it was believed that imagination was necessary for the appreciation of the newspaper article as a form of entertainment. In the 1910s, however, the writing of mysteries and “black curtain” articles had yet to fuse, but in analyzing the works of the 1920s, it is possible to discern that they were written based on the imagination used for the “black curtain” articles. From this point, “black curtain” article and mysteries fuse, and mystery novels that problematise China begin to be produced.

キーワード 近代中国 探偵小説 黒幕小説 投稿 程小青 孫了紅

1 はじめに

探偵小説は、1840年代のアメリカにおいてエドガー・アラン・ポーによって発明された文学ジャンルであり、現在に至るまでに大衆小説の有力ジャンルの一つとして成長したことに異論はないだろう。その成立の背後には、急速に発達したジャーナリズムとそれに群がる読者たちの存在があったとされている¹⁾。

ポーの作品は、フランスやイギリスに翻訳を介して伝播することにより、フランスではエミール・ガ

1) ジャーナリズムと探偵小説の関係については、『ポーと雑誌文学——マガジニストのアメリカ』（野口啓子、山口ヨシ子編 彩流社 2001.3.31）「第Ⅰ部ポーの推理とジャーナリズム」などに詳しい。

ポリオによる探偵ルコックを、イギリスではコナン・ドイルによるシャーロック・ホームズを生む素地となっていく。つまり、探偵小説が発明されたアメリカを除いて、他の国では、ポーを受容——より大きく言えば翻訳探偵小説を受容したことにより、その国独自の探偵小説をスタートさせたと考えられるのだ。

近代中国も例に漏れない。探偵小説は清末に翻訳を通して受容され、大流行した。阿英は『晚清小説史』で、当時の翻訳小説の半数が探偵小説だと指摘している。

そうした状況が進展して、中国に探偵小説の創作ブームが到来するのは1920年代とされている。²⁾ 本論では、1920年代の探偵小説に注目し、特に「黒幕」をめぐる想像力という角度から、近代中国における探偵小説の誕生について考察してみたい。

2 「黒幕」をめぐる想像力と探偵小説

「黒幕」とは、「黒幕」記事、それに端を発した「黒幕小説」を指す。これらは、従来の文学史の中で暴露記事、暴露小説的であり、文学的価値は皆無³⁾ だとされてきた。この「黒幕」は、当時『新聞報』『申報』『時報』に次ぐ総合紙として位置づけられていた『時事新報』の新聞副刊『報余叢載』に1916年に「黒幕」という投稿欄が設けられ、読者投稿が募られたことに端を発する。この投稿「黒幕」欄は、1918年に突然同紙に打ち切りの記事が掲載されるまで、何度も投稿募集の記事が掲載され、またひいては副刊の固定記事となり、時折掲載された「黒幕」記事の総集号が発行されるなど『時事新報』のセールスポイントとなっていたようだ。

その内容は、盗み・詐欺・誘拐などの犯罪の手管の暴露や、それらの犯罪にあったという体験記である。読者がさも自分が見聞きした、あるいは体験したかのように語られるが、その地名や固有名詞は基本的に「某所」「私の友人の某」のようにはっきりと語られることはない。

このような「黒幕」は他の新聞にも伝染していき、『新聞報』『申報』『時報』にも類似の読者投稿欄が作られていった。これらの「黒幕」を細かく見ていくと、実はこれらは、読者が新聞報道などにヒントを得て書かれた創作風記事であることが分かる。

2) 1920年代には、当時の雑誌『半月』や『紫羅蘭』の中で読者からの雑感に、探偵小説が流行しているという内容の投稿が散見できる。(拙論文「1920年代における探偵小説創作の黎明-近代中国と日本の「雑誌空間」を通じて-」(『東アジア文化交渉研究』、4、pp253-271、2011-03-31 関西大学)を参照を参照。)さらに『近現代通俗小説文学史』(范伯群、江蘇教育出版社、1999)等でも、1920年代を探偵小説創作のブームと位置づけている。

3) 魯迅は『中国小説史略』(北新書局 1926)の中で「黒幕小説」について「此外以挾摘社會弊惡自命，撰作此類小説者尚多，顧什九學步前數書，而甚不逮，徒作譙訶之文，轉無感人之力，旋生旋滅，亦多不完。其下者乃至醜詆私敵，等于謗書；又或有嫚罵之志而無抒寫之才，則遂墮落而為「黒幕小説」。(以上のほかに社会の悪弊をえぐることを主題として、この型の小説を作った人は、まだ多くいたが、十中八九までは、前述の数種の小説を模倣して、はるかに及ばず、いたずらに痛罵叱責の文章を作って、反って感動させる力がなく、作られては消滅して、未完のものも多かった。その低級な物は、個人的な敵を醜く描いて攻撃し、誹謗の書と同じであった。さらに、ある者は毒舌をふるう野心はありながら叙述の才能がないので、そのまま墮落して「黒幕小説」になってしまった。(翻訳は今村与志雄訳『中国小説史略』(筑摩書房 1997年)による))と述べている。

つまり、「黒幕」とは、つまり当時の読者が犯罪やそれに類するものを娯楽として享受していたということを示すものである。そして、この投稿「黒幕」記事に発した想像力は、やがて「黒幕小説」と呼ばれる暴露小説のジャンルとなっていく⁴⁾。

大切なのは、「黒幕」が中国における探偵小説の創作に大きな影響を与えているということだ。それは、探偵小説の創作の背後に、急速に近代化を遂げるジャーナリズムの存在があったことと関係する。

ポーの「モルグ街の殺人」や「マリー・ロジェの秘密」といった作品を考えてみればよい。前者は探偵であるデュパンが新聞を通じて事件を知り、後者は、当時の実際の新聞記事の引用が小説の骨格をなし、デュパンが読者としてそれを読み、その報道記事の合間に彼自身の推理を挟み込み謎に迫っていく。かのアルセーヌ・ルパンもメディアを使った怪盗として描かれている⁵⁾。これらの作品は、1840年代のアメリカにおける近代ジャーナリズムの勃興期に書かれたものであり、当時は、たくさんの人々がセンセーショナルなニュースを読むために新聞を買った時代であった。これらの作品の出現は、読者にとって新聞記事を読むこと自体がある種の娯楽となっていたことを示しており、犯罪やそれに類するものを娯楽として読むことが、探偵小説の誕生と発展に大きく関わっていたことを示唆している。

つまり、近代中国において「黒幕」とそれを享受／創作する読者が大量に生まれたことは、近代中国に探偵小説を創作する素地が生まれ始めている可能性があることを示していると考えられるのである。

ただ、筆者が調査した中では、1916年から1918年の間の『時事新報』の投稿「黒幕」記事は、探偵趣味を帯びた作品が数編ありはするが、江戸川乱歩が「探偵小説の定義と類別」⁶⁾で指摘するような「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である。」という構造を実現したような近代探偵小説の構造を持ち得たものはなかった。また、『時事新報』紙には当時探偵小説が連載されていたが、それらは翻訳もの、あるいは翻訳風のものであった。そして翻訳風の探偵小説が人気を占めるという傾向は『新聞報』や『申報』などでも同様であった。『時事新報』の読者たちは、犯罪などの新聞報道にヒントを得て書かれた創作記事——「黒幕」を娯楽として享受しながら、同時に、外国の翻訳探偵小説を享受していたのである。

中国において「黒幕」に関する想像力は、探偵小説とはどのような関係にあったのだろうか。以下、「黒幕」を受容し、創作にもつながった中国の読者の想像力が、探偵小説の創作とどのように結びついたか、具体的な作品を取り上げながら、考えてみたい。

3 1910年代後半：「黒幕」と探偵小説の乖離

探偵小説ブームを迎える1920年代の作品を考える前に、まずその過渡期である1910年代後半の作品に焦点を当て、早期の創作探偵小説と『時事新報』投稿「黒幕」記事に見えた探偵趣味を帯びた作品が、

4) 『時事新報』「黒幕」記事と探偵小説の関係に関しては拙著「『犯罪』を消費する読者と『時事新報』『黒幕』欄——近代探偵小説研究への視座として——」（『野草』88号 中国文芸研究会 2011.8.1）を参照されたい。

5) 山田登世子「メディアのアイドル『怪盗ルパン』」（『現代思想』第23巻第2号 1995.2.1）を参照。

6) 『幻影城』 岩谷書店 1951

どのような様相を呈していたのかを確認してみよう。

①『新聞報』文芸副刊『快活林』における「偵探小説 燈光人影」コンテスト

『新聞報』は、民国期に『申報』と並ぶ有力な総合紙であるが、その文芸副刊『快活林』は、いわゆる鴛鴦胡蝶派の牙城として知られている。

嚴独鶴が主編を務める『快活林』では、文芸コンテストの会として「快活林奪票会」があった⁷⁾が、その第一回の題目として、1916年12月に「偵探小説 燈光人影」の課題が発表され、同年12月末から翌年の2月にかけて、13編の探偵小説が掲載された。この中には、程小青の霍桑もの第一作目とみられる作品も含まれている。管見の限り、近代中国で創作探偵小説の投稿コンテストが行われたのはこれが最初である。1916年末の段階で、嚴独鶴が創作探偵小説のコンテストを呼びかけたことは、当時読者の間に探偵小説を創作できるという雰囲気がすでに存在していたことを意味している⁸⁾。

それでは、コンテストに投稿され、掲載された作品にはどのような特徴あったのだろうか。

実は、掲載作のほぼ半数である6篇は外国を舞台にしたものであり、その中にはシャーロック・ホームズのパステイーシュが目立った。例えば下の例は、その中の一つで、ホームズ対ルパンのパステイーシュである。

「ああ、ホームズ君。私は、この荒れ果てた塔で無為に一晚を過ごすことになるのか。悪辣非道のアルセーヌ・ルパンがまさにロンドンの人の波に紛れて、いつものうでをふるっていると言うのに、彼に会おうというのは軽はずみではないかね。」警察署長のメイヤース（原文：梅而生）は焦燥のために顔をしかめて言った。ホームズは、冷たくそれに答えた。「もし耐えられないのなら、帰って枕を高くして待っていてくれたまえ。」⁹⁾

残る7篇も中国国内を舞台にしているものの、シャーロック・ホームズが上海にやってきて失敗をする、あるいは流行の探偵術にかぶれたある人物が失敗するという滑稽小説風のものもあり、中国を舞台にした探偵小説として読めるのはほんの2、3編ほどである¹⁰⁾。またそれら少数の中国を舞台にした小

7) 快活林奪票会は、『快活林』編集部に参加の旨を送り許可されると、『快活林』紙上で発表される課題に投稿する権利を得る。周瘦鵬など当時の有名編集者や作家も多く参加していたようだが、『快活林』紙上に発表される名簿を見る限り多くの一般読者も参加していたようである。

8) ほぼ同時期に『申報』文芸副刊『新自由談』においても、探偵小説の事件発生編を掲載し、読者から解決編を募るコンテストが行われている。1916年11月10日から14日まで『新自由談』に天虚我生「小説謎 紙幣案（一）」を掲載して解決篇を募り、同月23日から27日まで孫千里による解決篇が、28日から12月1日まで（兪）天憤による解決篇が掲載された。

9) 原文：“嗟乎，福爾摩斯君，吾人將在此荒塔中枯坐一宵耶。吾知萬惡之亞森羅蘋，方溷迹倫敦人海中，逞其故技，而君乃欲於是間遇之，不其愼耶。”警長梅而生言時，蹙額攢眉狀至焦躁。福則報以冷語曰：“君如不耐，而可歸而高臥以俟之。”（作者：天白 1917年1月6日—7日）

10) 『新聞報』文芸副刊『快活林』における探偵小説のコンテストについては、拙著「燈光人影——《新聞報》文藝副刊《快活林》与早期創作偵探小説」『文學與美學 第十一屆論文集』2010.10 p347-p365（台北 淡江大學中國文學學系）

説も、謎解きを目的にしようという意識は見られるものの、探偵小説としての体裁をкаろうじてなしている程度だと言った方がよい。彼らが当時受容していた欧米の翻訳探偵小説のレベルから考えれば、探偵小説の謎の設定やナラティブなどの点では、まだまだ未熟な作品と言えるだろう。一例を挙げよう。

雲の中に弱い光を放つ月が掛り、高い古塔を照らしていた。古塔はすでに三、四百年のものだ。毎晩、夜が更けて人気がなくなる頃、ある種のうら悲しい泣き声が途切れ途切れに聞こえるのだった。だから、皆古塔という言葉を目にすると、すぐにかぶりを振って眉をひそめてこう言うのだ、「ここは実は幽霊の住処なのだ」と。その夜、東方のホームズ黄仰福と助手の中国ワトソン馬景華がちょうどイギリスでコナン・ドイルに会って帰ってきた¹¹⁾。

引用したのは、周瘦鵬による作品であるが、このコンテストに書かれた中国を舞台にした作品は、この作品からも明らかなように、シャーロック・ホームズの影響を強く受けている。ホームズがどのように中国にて受容され「東方のホームズ」という探偵像を作り出して行くかは、他に稿を改めることにしたい。

この引用に描かれるように、作中における謎は古塔にて展開される。黄仰福と馬景華が偶然通りかかり、塔の中でふと見つけた死体から展開するのだが、不自然かつ非常に作り物めいた印象を拭えない。中国を舞台にした作品は多かれ少なかれこの特徴が見える。つまり探偵小説の核心である謎がその作品を編むためだけに作られたもののように思われるのである。つまり、この『快活林』における探偵小説コンテストに掲載された投稿作品は、すでに当時流行し始めていた「黒幕」をめぐる想像力とは直接的な関係を持っていないことが確認できる。

② 『時事新報』投稿「黒幕」記事における探偵趣味

さて、次に確認しておきたいのは、1916年から1918年まで『時事新報』で掲載された投稿「黒幕」記事の中の探偵趣味を帯びた作品である。探偵趣味を帯びた「黒幕」作品が、探偵小説の創作といかなる関係があったかを見ておこう。筆者が探偵趣味を帯びた記事として確認できたのは、全部で六篇である¹²⁾。いずれも規模の小さな窃盗事件であり、「女傭之黒幕（召使いの黒幕）」といったようなタイトルからも明らかなように、読者は読む以前から犯人が誰かが分かっている場合もしばしばである。

を参照されたい。

11) 原文：一鉤半明不滅の月亮冷挂在白雲堆裏，照著一座高高的古塔。這古塔已是三四百年的東西。每到夜深人靜的當兒，往往有一種悲涼幽■（■は印刷状態が悪く判別できない文字）の哭聲，若斷若續的逗將出來。所以大家一聽得古塔兩字，便人人搖頭個個皺眉說：“這裏頭實是一個鬼窟呢。”這天晚上，東方福爾摩斯黃仰福和他的助手中國華生馬景華，正從英國見了柯南道爾回來。（作者：周瘦鵬 1917年1月15日—17日）

12) 六篇は以下の通り。（ ）内は作者名を指す。「女學生之黒幕（短篇）鑽石之戒指」（襟亞） 1918年3月18日～3月21日、「女傭之黒幕（短篇）（四）隔室竊珠」（韻笙女士） 1918年4月5日、「包車夫之黒幕（短篇）」（絜夫） 1918年8月22日～8月23日、「盜竊之黒幕（短篇）」（便便） 1918年9月7日～9月8日、「女傭之黒幕（短篇）（二）潛偷食米」（馨蘭女士） 1918年10月7日、「女傭之黒幕（短篇）（三）竊取珠花」（馨蘭女士） 1918年10月8日

兄が事情を話し終えると、私は思わず手を叩いて神の歌を歌った。母もまた喜び兄を褒め称えて、「お前は本当に東方のホームズだね」と言った¹³⁾。

ここでは、語り手「儂（わたし）」の兄が「東方のホームズ」と褒め称えられていることから分かるように、探偵小説もしくは探偵というものを意識した作りになっている。しかし、「兄が事情を話し終えると（原文：兄述其事畢）」とあるように、真珠を探し当てた顛末は、兄の口から過去から現在へと時系列通りに語られ、体験談となっているため、謎解きを核心とした探偵小説にはなっていない。

以上の分析から、探偵小説は、中国を舞台にはしているが、当時の中国社会に即した作り——「黒幕」を巡る想像力を反映してはおらず、また「黒幕」は、探偵を登場させるという意識は持ち始めたが、探偵小説になり得ていない状況も確認できた。1910年代後半には、探偵小説と「黒幕」が、まだ乖離していたと言ってよいだろう。

4 1920年代：探偵・怪盗は新聞を読む／使う

1920年代に入ると、探偵小説と「黒幕」をめぐる想像力との様相が次第に変わってくる。すべての作品というわけではないが、テキストのなかに新聞が取り込まれ、その中には、背後に「黒幕」を巡る想像力をうかがえるものが見えるようになっていく。1920年代の作品を中心に、いかに新聞を取り込み、そして「黒幕」を巡る想像力と関わっていたのかを考えたい。

以下は、程小青が『先施樂園日報』に1920年4月9日から16日まで連載した「鞋尖泥印」の冒頭部分である。

「不可思議にして恐ろしき暗殺事件」

この市の名士徐挹馨が、昨夜夜半自宅の裏にて刺殺された。もともと徐氏は警察署長の汪義に招かれて酒に酔い、帰宅しようとした時にはすでに十二時過ぎであった。警察署から徐氏宅までは、遠くなかったので、かごには乗らなかった。徐氏は来訪時に信頼をおいている使い走りを連れてきたが、帰るときもこれを伴とし、警察署長の汪義が送った時、使い走りが前に立って提灯をかざしていくのが見えたという。通りは静かで、行方は杳として知れなかった。夜回りの警邏が、交差点を歩いていたが、彼らには気づかなかった。夜が明けると、徐氏の執事が駆けつけて、警察署長に、主が昨晚帰っていない、と言ってきたが、今朝方、その死体が発見された。裏庭で血の海に仰向けに倒れて、腹が切られていた。その様は実に無惨で、何者かに殺害されたことは明らかだった。死体の傍らに提灯が残っており、衣服は乱れていなかった。使い走りが逃げたおり、疑わしい状況だった。署長は知らせを受けて、各部署に使い走りを追跡するよう指示し、裁判所に、本日朝から証拠を収集し、犯人を逮捕につとめる、と報告した。この事件は見たこともない奇妙な成り行きである。本紙は独自に証拠を収集し、号外を発行して

13) 原文：兄述其事畢，儂不禁拍掌唱上帝之歌，母亦大慶慰並諛阿兄曰：兒殆東方福爾慕斯歟。（「女傭之黒幕（短篇）」（四）隔室竊珠」韻笙女士 1918年4月5日）

皆さんにお知らせする。どうか次のニュースをお待ちいただきたい。「武林日日新聞 号外」

この不可思議なニュースがあったのはある日の明け方、我々が武林の宿に滞在している時だった。私と友人霍桑は、春の休暇に乗じて、二日前に同窓生の薛航の招待に応じて、杭州に遊びに来ていたのだった¹⁴⁾。

以上に引用したのは、程小青が『先施樂園日報』に1920年4月9日から16日まで連載された「鞋尖泥印」の冒頭部分である。この作品は、冒頭に『武林日日新聞』の号外記事を引用している。新聞記事が実際のものかどうかは別として、管見の限り、中国の創作探偵小説が、中国で発生した事件の新聞記事を引用するのはこれが初めてである。

この形式が彷彿とさせるのは、日本で言えば、創作探偵小説の第一作であるとされる黒岩涙香の「無惨」である。「無惨」は、実際に発生した事件に基づいており、新聞記事を冒頭に引用している¹⁵⁾。

程小青の作品では、「東方福爾摩斯（東方のホームズ）」である霍桑とワトソン役である包朗が、引用した新聞記事をきっかけに、殺人事件に興味を持つ。さらに注目すべきは、霍桑は現場に足を運ぶことなく、冒頭の報道記事と友人である薛航からの事件に関する情報を手がかりに推理を進めていくことだ。例えば、霍桑は、薛航から捜査線上に浮かんでいる第一の容疑者は、徐挹馨と一緒に帰った走り使いだと聞くと、

新聞記事によれば、走り使いは被害者が信頼していたという。だとすれば長く仕えていたのは明らかで、もしそのものが仇を討とうとするならば、なぜ長い間仕える間に、さっさと手を下さなかったのか、このような様々な事は、彼が犯人でないということを示している¹⁶⁾。

とその容疑を否定する。そして惨殺体であることなどの情報から、犯人の靴は必ず血に汚れていると推理する。霍桑と包朗が杭州を離れるその日に新聞を買うと、そこに「疑案結束紀」という事件解決の記事が掲載されており、それによって事の顛末を知ることになる。記事によれば、霍桑の推理通り、犯

14) 原文：「離奇駭怖之暗殺案」本城鉅紳徐挹馨昨夕夜半忽為人刺死於其宅後，先是徐君應警察署長汪義招飲，酩酊辭歸時，已夜半，以警署距徐宅匪遠，未乘肩輿，赴約時徐君以一親信之小僮自隨，比歸，遂復挾僮為伴，而當署長汪義送客時，見小僮提燈前行。街中靜闐，行蹤都杳，但有巡夜警邏，蹀躞路口，固不虞其有他也。迨今晨破曉，徐宅總管倉忽皇來報署長，言其主作宵未歸，今晨忽發見其屍，偃臥於後園外血泊之中，破膛洞腹，狀殊慘慄，顯為人謀害無疑，屍畔遺一紙燈，衣物無恙，而宵小僮在逃，情至可疑。署長得耗大震刻已通飭各屬追跡逃僮並稟白刑廳，定今日晨刻蒞驗以備搜集證據，嚴事緝凶，此案情節離奇得未曾有，本報得耗獨先探究翔實，用特刊發號外，以供眾覽，餘情如何容俟續聞。『武林日日新聞號外』此奇賊之新聞一日侵晨，余等乃為之於武林逆旅之中。蓋余與友人霍桑，乘春假休假，兩日前應同窗薛航之招，來杭游覽。

15) 「無惨」は明治22年7月5日に発生したある殺人事件を題材にした小説で、その翌日に『絵入り自由新聞』が報道した実際の雑報記事を冒頭に引用している。

16) 原文：且据報紙記載，小僮為死者親信之人，則服役已久可知，僮果圖仇又何為久愍仇所，而不早下其手，凡此種種皆足徵非兇人。

人は、警察の容疑者ではなく、別の人物——血に染まった布靴の持ち主であった。警察がなぜ真相を知り得たかと言うと、その真犯人が自殺し、犯行を自供した遺書が発見されたからだ。遺書も新聞に掲載されたことにより、霍桑の推理した通りだったことが分かるのである。

このように「鞋尖泥印」では、探偵小説のテキストの中に新聞記事が編み込まれている。探偵は新聞記事によって情報を得、それを使って推理を展開し、さらに真相も新聞記事によってもたらされる。これは霍桑によるある種の読書体験的な探偵小説であり、ポーの「マリー・ロジェの謎」を彷彿とさせる作品でもある。

程小青の作品の中では、このような新聞記事の引用が積極的になされていくようになり、1921年9月より『礼拝六』で連載された「断指党」でも、霍桑は新聞を用いて情報収集を行っている。

ここで気をつけたいのは、新聞記事が探偵小説のテキストに入り込むという傾向は、何も程小青の作品に特有のことではないことだ。1920年代に書かれた探偵小説は積極的に新聞記事を引用する。もうひとつの例を確認してみよう。

以下に引用するのは「東方のホームズ」譚ではなく、中国の探偵小説のもう一方の翼を担っていると考えても良い「東方亞森羅蘋（東方のアルセーヌ・ルパン）」譚である。所謂「東方のアルセーヌ・ルパン」の作者は数人いる¹⁷⁾が、ここで取り上げるのは、孫了紅が1923年に『偵探世界』第6期に執筆した「傀儡劇」である。

朝食の後、方昆と盧倫の二人は、書斎で向かい合って新聞を読む。これは彼らの日常の習慣であった。地元ニュースの一節を読んだとき、突然、注意をひかれた。そのニュースの題名は、「大偵探盧倫の近況」であり、そこにはこう書かれていた¹⁸⁾。

これは、冒頭部分だが、私立探偵である盧倫とその助手方昆にとって、新聞を読む事が日常の習慣と描写される。さらに原文では、この次にある新聞記事「大偵探盧倫の近況」が引用される。

著名な私立探偵盧倫氏は、最近古物収集家の楊逸氏の臨時顧問として招かれた。楊氏が今回上海に来たのは、顧虎頭と吳道子の真跡をそれぞれ一幅ずつ携え、来週月曜より、世界古画展覧会にて国内外の人々に披露するためである。これらの書画は、非常に価値があるものであり、それ故に悪人たちの注目の的となっている。楊氏には毎日のように策を弄して盗み出すという脅迫状が届いており、楊氏はたいへん恐れている。租界の警察に捜査を依頼する他に、盧氏にその保護の一切を依頼した。盧氏はこれまでに多くの不思議な事件を解決しており、今回、楊氏の依頼を受諾したのを機に、それを宣言し、悪人の氣勢をそいで、それ以上の事を発生させないようにしている¹⁹⁾。

17) 1920年代に「東方のアルセーヌ・ルパン」は孫了紅の魯平以外に、何樸齋の魯賓、吳克洲による羅平等があげられる。

18) 原文：晨餐後，方昆和盧倫兩人，面對面坐在書室裏讀報。這是他們日常的一種功課。讀到本埠新聞裏的一節。忽現出注意之色。那新聞標題是「大偵探盧倫近訊」原文說：

19) 原文：著名私家偵探盧倫氏，近已被古物收藏家楊逸君延為臨時顧問，因楊君此次來滬，●有顧虎頭及吳道子之真跡

この記事は、殺人や盗みには直接関係のない記事であるが、方昆はこれを読むと、

方昆はその新聞記事を読み終えると、なんとも不快になった。なぜなら盧倫と一緒に仕事をして以来、いかなる事件だろうと盧倫は彼と話し合ってきたからだ。この事件についてのみ、盧倫は事前に一言も触れなかった、まったくもって秘密にすぎる。それに彼は盧倫がこの事件について秘密にしなければならないのなら、とことん秘密にすべきなのに、どうして新聞が知っているのだろうか²⁰⁾。

と、秘密にすべきことがなぜ記者に嗅ぎ付けられ記事となったのか訝しむのである。そしてそれを盧倫に告げると、その反応は思ってもみないものであった。

盧倫は、新聞をもぎとると、一息にその記事を読み、突然髪の毛を掻きむしって叫んだ。「一体誰がやったんだ。くそっ、私はこのことを誰にも言った覚えはないぞ。」²¹⁾

盧倫は、この依頼について誰にも言っていないと言う。そして、彼は、

「私の推測によれば、今日のあの記事はやつが仕組んだもの、もしくはこれこそがやつから私への攻撃開始の手段に違いない。」方昆はここまで聞くと、顔に怪訝な表情を浮かべて、「さっきから「やつ」と言っているが、一体誰のことだ？」盧倫は大声で言った。

「東方アルセーヌ・ルパン！魯平！」²²⁾

と盧倫は、この情報がリークされたのは、彼——東方のアルセーヌ・ルパンである魯平の仕業であり、それが彼からの攻撃であると位置づける。東方のアルセーヌ・ルパンは本家ルパンほどの「メディア男」²³⁾ではないが、当時のジャーナリズムを利用して自らの存在を匂わせ、そして人々を手玉にとる存在

各一幅、將於下星期一陳列於世界古畫展覽會，供中外人士賞覽。此項畫件，為值甚鉅，故已引起宵人之覬覦。連日楊君疊接恐赫信札，謂將一施其詭策手段，楊君得信，大為恐慌。除報捕房密查外，復婉懇盧氏為之保護一切。盧氏前此嘗破獲奇案無數，今既慨允楊君擔任此事，逆料先聲所至，能奪宵小之魄，而不致發生以外也。

20) 原文：方昆看完了這一節新聞，心裏很覺得不快，因為他和盧倫共事以來，不論甚麼案件盧倫都和他商議的。獨有這一件事，盧倫在事前竟不曾提及一句，未免太秘密了，並且他想盧倫對於此事要秘密就該秘密到底為甚麼又被報界裏知道呢。

21) 原文：盧倫把報搶在手裏一口氣讀完那一節新聞忽地用手亂搔着頭髮喊道：“這是誰弄的玄虛啊，可惡可惡，我並不會把此事宣佈出去啊。”

22) “據我的推測，今天那新聞也是他設法登的，或者這就是他向我開始攻擊的一種手段。”方昆聽到此處漸露注意之色問道：“你一連說幾個「他」字，究竟指誰？”盧倫高聲說：“東方羅蘋！魯平！”

23) 山田登世子氏は、「メディアのアイドル『怪盗ルパン』」（『現代思想』1995.2青土社）の中で、「犯罪者とは、痕跡を消す者であり、逃れる者である。そしてそれを追跡するのが探偵だ。ところがルパンは、探偵小説のこの常道をひっくり返す。ルパンは犯行を予告し、署名を残し、そして、自分の英雄的勝利を派手に喧伝する。メディアをと

であることを示唆するものだろう。

ここでは、新聞が、探偵・怪盗にとって重要な情報源であると同時に、それらを事件解決または相手への攻撃道具として使用されていることが見て取れる。

以上の二つの作品の分析から、1920年代の探偵小説作品が新聞記事のテキストを内在化させていくことが確認できる。「黒幕」がすでに生まれ、読者が新聞を娯楽として読んでいることがほぼ前提となっている当時において、このように新聞記事が探偵小説に取り込まれていくことは、とりもなおさず、読者が新聞を日常的に娯楽として読む／消費するという行為がテキストに内在化されていくことに他ならない。それは「黒幕」が発生しうる想像力とたいへん近いところにあると言ってよいだろう。

5 「黒幕」に挑む探偵・怪盗、そして読者

以上、1920年代における探偵小説と新聞記事との関係を分析した。だが、これまで紹介した例は、シャーロック・ホームズが新聞記事を引用していることや、アルセーヌ・ルパンが「メディア男」である、という近代探偵小説の影響を受けて書かれていることを意味している、と説明することができるかもしれない。ただ、その一方で、「黒幕」の流行と、それをめぐる想像力の普及が大きな影響をもたらしていることも考える必要がある。

下に引用するのは、1924年11月9日に『紅』雑誌の第64期に掲載された陸瞻盒による「李飛探案 古塔孤囚（上）」の一節である。1920年代に生まれた「東方のホームズ」の一人、職業私立探偵ではなく言うならば素人探偵である李飛が、ある事件に興味を持つ過程が描かれる。

（李飛は）言うとな彼の手中の新聞を私に渡し、ひとつの広告を指差し、「ここの広告を見れば、私の言っていることがすぐに分かるさ。」と言う。彼が指差した広告をみると、そこには大きな字で「張維城君の親友とご家族へ」と書かれていた。（中略）私は読み終えると彼に訊いた。「つまりこの事件を調査しに行くつもりだというの？」（中略）（李飛は）「事件を調査するのは、肉体的にはもちろん大変だし、危険かもしれない。ただ、他人の黒幕を暴いた後、精神的には却って楽しいのさ。」²⁴⁾

ここで、李飛は、前の分析の通り、新聞記事を通してある事件に興味をもっている。注目したいのはその後である。彼はなぜ手間を惜しまず、危険を顧みず、自らとは何の関係もない事件に興味を持ち、それを捜査しようとするのか。李飛は「他人の黒幕を暴いた後、精神的には却って楽しい」と言う。ここで李飛ははっきりと黒幕という言葉を用いている。

1916年以降、『時事新報』の投稿「黒幕」欄の誕生以降、「黒幕」記事だけでなく多くの「黒幕小説」

してアルセーヌ・ルパンの名を世に広めるために。怪盗紳士ルパンは、希代のメディア男なのである。」と述べる。

24) 原文：（李飛）說著便把他手中的報紙授給我，指著那報上的一條告白道：“你看了那一節告白，自然就明白我的意思了。”我看了他所指的那一段告白，上面有十個大字是：“張維城君親友家屬均鑒”（略）我看完之後便問他道：“就是你想去調查這一事情嗎？”（略）（李飛道）“偵查案子身體上果然很勞苦，或者還很危險。但是揭破了人家的黑幕之後，精神上卻是愉快的。”陸瞻盒「李飛探案 古塔孤囚（上）」（『紅雜誌』第64期 1924.11.9）

が誕生し、また社会小説との関連性が指摘されている²⁵⁾ことを考えると、「黒幕」という言葉から読者たちが想像するのは、これらの『時事新報』から連なる「黒幕」の類だと考えられるだろう。

つまり、李飛は、好奇心から、当時の社会に存在していた、特に多くの読者たちの中にあった、いわゆる「黒幕」を暴くために素人探偵をやっていることが分かる。

また他の例を見てみたい。

以下は、孫了紅が『偵探世界』第24期（1924.2）に書いた「東方アルセーヌ・ルパン」譚、「白熊」である。この作品は「私」が黄葉路の博物館でおきた白熊標本の失踪事件に興味を持ち、そこに話を聞きに行った事に端を発する。

博物館の管理人は五十歳近くで、見るからにまじめそうな人物であった。彼は私が白熊という言葉を出すと、怖がった顔色になって、小声で、「この事が分かってから、たくさんの新聞記者がずっと私のところに来て訊くんです。すでに詳しいことは彼らに言ったので、新聞を買って読んでみたらそれで分かりますよ。（略）あれは本当に恐ろしいことですよ、思い起こすだけで震えがきます。一言も繰り返して言いたくはないのですが」私は言った。「新聞の記事はすでに読んだんです。ただ、あなたの口から聞きたいと思ったのです。詳細で、確かでしょうからね。ですから、もう一度お話しいただきたいのです。」²⁶⁾

このように、「私」は、博物館の管理人に話を聞きに行く。その動機はやはり新聞記事である。この事件は既に報道され、「私」もその記事を読んだ事によって興味を持ったのだ。

結局、管理人は、白熊標本失踪案の仔細を「私」に語って聞かせる。その不思議な事件に私は頭を悩ませるが、「私」はまったく解決の糸口を見いだせない。そこで「私」はある人物を思い浮かべるのである。

私の頭は単純すぎて、このような不思議な問題は どうしたって解けるわけがない。友人の魯平に聞きに行った方がいい、魯平は頭がよいばかりか、驚くべき観察力があるのだ。彼が難題に出会わなければそれはそれだが、もし出会えば彼が解決できないものはない。そこで、私は家に帰るとすぐに魯平に電話をかけた。（魯平は）「そんなのは三分間で解決できる問題だ」魯平のその何でもないうという語調をよく考えると、黒幕の中の事情を彼はすべて知っているようだった。これこそ不思議中の不思議というものだ²⁷⁾。

25) 『中国現代通俗文学史』（范伯群 北京大学出版社 2007）「第八章 1916年“問題小説”之引進与“上海黒幕”之征集」に社会小説である朱瘦菊の『歇浦潮』と「黒幕」との関連性が指摘されている。

26) 原文：博物院の管理人年近五十，從外表上看起來，卻是個很誠僕的人。他一聽我提起白熊二字，面上頓時添了一重驚怖的顔色囁道：“此事發現以後，就有許多新聞記者接連不斷的來問我。已把詳細經過據實向他們說過，你不妨隨意買一份報看看便可知道……那件事真是可怕得很。一想起就令人戰慄，我委實不願意再提一字咧。”我道：“報上的紀載我都已看過，不過我以為你親口的演述，比較的終詳細可靠一些。因此我要求你再說一遍啊。”

27) 原文：我自己腦筋太簡單，萬萬不能透解這種神祕的問題。不如去問問吾友魯平，魯平思想既好又驚人的觀察力。他

引用から分かるように、その人物とは魯平——東方のアルセーヌ・ルパンである。不思議なことに「私」は魯平に気軽に電話をかける友人であり、彼は、魯平は「頭がよいばかりか、驚くべき観察力がある」と思い当たり、彼に解決の糸口を見いだそうとするのである。そして、「私」の電話を受けた魯平は、「そんなのは三分間で解決できる問題だ」と一蹴するのであった。その不可思議な魯平の答えを聞いた「私」は、魯平は黒幕の中の事情をすべて知っているようだったと述懐する。「私」も前に挙げた例と同じように「黒幕」という言葉を口にしている。

社会の闇を推理して暴くというのは探偵小説の定石であるが、ただ、以上の二つの例から考えられるのは、これらの社会の闇というものに対して、「黒幕」という言葉を使用していることである。探偵は「黒幕」を明るみにさらすことに楽しみを覚え、そして怪盗は「黒幕」の事情を全て知っているかのような存在として描かれ、中国における探偵小説の背後には「黒幕」が存在したということを示唆している。

実は内容的にも、当時の探偵小説は、「黒幕」に用いられたモチーフを使用しているのではないかと考えられる。例えば、上述した程小青の「断指党」では、霍桑と包朗のもとに、ある日、人間の親指が送られてくる。そこから事件に巻き込まれて行くが、彼らはその親指が数日前に殺された大富豪の慈善家のものだと突き止める。だが、結末において、この被害者は慈善といいながら私腹を肥やしていた人物である事が明かされる。つまり、この作品は、ある慈善家殺人事件の謎を解明する探偵小説であると同時に、角度をかえてみると、読者に慈善家の「黒幕」を暴露するものでもあるのだ。慈善家に関する「黒幕」記事は、1918年3月28日の『時事新報』の投稿「黒幕」欄の中に見いだす事ができ、おそらく当時の「黒幕」の題材として珍しくないものであったことが推測できる

さて、ここでもう一度、「黒幕」とはどのような記事であったのか確認してみよう。包天笑が「黒幕」の「黒幕」を暴くような「黒幕」という短編を書いている。以下に引用するのは、ある編集者（彼）とある人物（私）との会話である。

彼は言った。「新聞を読む時に、新聞のローカルニュースや瑣末なニュースにちょっと注意すると、その中にたくさんの黒幕があることがわかる。」私は、「つまり、あなたの言っているのは、黒幕を新聞の中に探しにいけということですか、まさか、新聞の記事を切り貼りしてそうやって、黒幕大観を作るということですか？」彼は手を振って、「切り貼りして終わらせる訳じゃないですよ、もう一度作り直すんです。例えば、新聞に、ある公館の二号さんが逃げたという記事が載ったとしますよね、これは黒幕の大きなテーマが出たってもんです。新聞に載ったのはたったの三行でも、尾ひれをつければ1万字には、少なくとも数千字にはなりますよ。」²⁸⁾

不遇見難題便罷，遇見了是無有不打破的。（略）因此我回家之後忙打電話給魯平。（略）（魯平道：）“這種三分鐘可以解決的問題。”（略）細味魯平那種輕描淡寫的語調，似乎黑幕裡的事情他都知道，這真是不可思議中的不可思議了。（東方亞森羅蘋案「白熊」（孫）了紅『偵探世界』）

28) 包天笑『黒幕』（『小説画報』1918.7.1）原文：他道：“你要看報時，就留心報上的本埠新聞和那種小新聞，這裏頭就有許多黒幕在內。我道：“…現在你說這黒幕要在報上去尋，難道把報上的新聞剪下來，湊成一部黒幕大觀嗎？”他搖手道：“不是剪下來就算數，還要重新做過。譬如報上登了某公館的姨太太走了，這是他們做黒幕的一個大題目來了。那報上所等，不過寥寥三數行，他便裝頭裝腳，可以衍長至一萬余字，至少也得數千字。

上述の通り、「黒幕」とは読者がローカル新聞などの些末なニュースの中に見いだすものであり、いわば新聞記事にヒントを得て書かれる創作記事であったことが再確認できる。

この「黒幕」の背景に、新聞記事を読み、そこに「黒幕」を見だし、創作記事を書いて読者と作者が交替可能な空間である新聞副刊に投稿する人々の姿が浮かび上がってくる。

これらを念頭において今まで見てきた探偵小説の例をもう一度考えると、面白い事に思い当たる。

新聞のある広告／記事の中に「黒幕」を見だし、その「黒幕」に何が隠れているのかと謎の真相とは何かを突き止めようとする探偵李飛、そして白熊標本失踪事件の新聞記事から興味を持ち、その「黒幕」を突き止めようとする「私」、これらは新聞記事を読んでそこに「黒幕」を見だし「黒幕」記事を書いて投稿しようとする人々と重なって来はしないだろうか。

以上から、1916年当時には、探偵小説は翻訳小説の延長としての側面が強く押し出されて創作されたが、1920年代に探偵小説は、翻訳の影響を依然受けつつも変化していることが分かった。探偵小説は「黒幕」を書く作者／読者の視線をテキストの中に獲得していったことが確認できるだろう。

6 終わりに

1910年代末には探偵小説の創作は単純に翻訳を模倣したもので中国社会とはなかなか結びつかず、同時に存在した「黒幕」は犯罪を読者が娯楽として消費するジャンルとして成立しながら、お互いに接触・変質することはなかった。

しかし、1920年代になり、探偵小説の創作が積極的になされるようになると、探偵小説は新聞記事を引用し、当時の中国社会に起き得たような事件を注ぎ込んでいたことが確認できた。しかも、その新聞記事を引用する背後には、「黒幕」の存在があることが分かった。つまり、1920年代の創作探偵小説において、探偵小説と「黒幕」は融合したのである。

これは一体何を意味するのだろうか。新聞を読み、そこに「黒幕」を見だし創作記事を書く読者たちと、新聞を読み、その記事に興味をもって調査を始める探偵たち——読者は探偵小説を読む時に、同時に「黒幕」を探し娯楽として享受する自分たちを読んでいるのである。「黒幕」という想像力が発生した時、新聞の読者たちにとって、世界は多層化したのだ。つまり、彼らが毎日目にするものの背後に幾層になっているかもわからない「黒幕」が出現したのである。彼らは、現実と「黒幕」とに多層化した世界を娯楽として、新聞を通して享受していたのである。そしてその多層——「黒幕」という想像力が、翻訳を通して中国にやってきた探偵小説の中に入り込んでいったのである。探偵小説の読者たちは、「黒幕」を絶えず探している自分たちをそこ読み出し、探偵と自分を重ね合わせながら謎解きをする。ある意味で中国独自のリアルさが獲得されていたのではないだろうか。そしてこれは、探偵小説が近代中国に獲得された——本土化の一つの側面と考えてもよいのではないだろうか。

